特116
713

繪馬
現在七面
賢君

六

472
196

始

4冊116
213

大正
3. 8. 27
内交

4冊116
213

帝國圖書館藏

大正
3. 8. 27
内交

繪馬　伊勢齋宮繪馬の神事を作れるなり

現在七面　日蓮上人身延山中にて修行のをりしも七面山の龍女あらはれて法華經の功德に成佛する事を作れり

昭君　漢の勅命に依り獨り胡國に遣はされ困苦を受けたる王昭君の物語を作れり

十二月　初能　神祇

作り物　小宮周ヰ戸

脇　三大臣

立役　ツレ三人

位序破急　前シテ老翁　後シテ天照太神　ツレ老嫗　所ハ伊勢　ワキ臣下

繪馬

治め給ふと聞く。伊勢乃宮居よ参らん。抑是も大炊の御門よ仕へ奉る君下知。梅も我も伊勢ぞ神ヶ宮と信じ奉れば寶と捧げ奉る其勅と蒙り。唯今伊勢に集ひ仕ふ風いうへ有る松ちやり〳〵

雲雀たちくる粟津野乃草乃志
げきをとる越ゆく瀬田の長橋打渡り
野路志のはら草枕夢も一夜表
指寝かれし鏡山ぼ老そや勢
州安宗よ着く今日も節分よ
て此所よ絵馬を掛る御作例
ぞと由可よ道留し捻るを掛る者を

ツレ 面姥、着流 黒馬ノ絵馬右ニサゲル
太夫 大ロ尉、扇指 白馬ノ絵馬右ニサゲル

見だやとなん 荒玉乃年よ心をわらす
乃年も久しき恵まれ 霧も雲もおさ
まもとお年をやいそん年のくれ 友
馬を箕山の野ますれち牛を桃林よ
放つ事皆聖人乃わざなれ それは
うしときはのあらひ時よあらまそて四方
乃海も波あらさなどかそへても君がよのまゝ

乃あるを数とたとへても猶あり難や
下南 ゆ早振神代と関べくるのみ天津
日つぎの代代かりて人皇来代乃
子孫迄あるとて恵どう者つぎて治
まる御代乃我らまぐなぬ君とあふ
ぎつゝ宣仕へ奉るいつ迄成
人ぐさ多べきるみ世世

いろ行事ゆてゆぞて 今迄可よ 絵
馬と掛ると申ゆ加ゆそゆろ さんゞ則
我らゞ、絵馬と掛ゆよ 丈行ゆ渇よ後て
掛られるぞ 是ゆ唯一ツ切宮ぞ乃、愚癡
無智あると像ゆ。馬ゆ毛よりと四年ゆ日
とちり。亦雨ぞ紀年とも心ゆべき為ゆて
早上カル 相
ゆ〻今迄いろ行る絵馬と掛。明年ゆ日

とかきし絵に掛ひゝらば生も等しき
まだ先雨露の恵をうけ民はこゝろも
いさゝあるよみぢれくろの絵をるとけ
国土豊にあるべきなり習は耕作の
道の過あるを社神慮も悦ぶ絵ふべけれ
先浜厨が絵馬を掛民を悦ばせむやと
思ひは右様よ謂ものの絵をば此方も法

らま劣るまじ力をもいれずして天地
を動かし目に見ぬ鬼神をもあはれと思はせ心をも和
ぐれ詩歌は八雲をときまてあまぎる
雲れなべてふる是ぞおぬ刀で嫌ふ神き
かくしも互にあらうが隙行駒のいと
いざやその絵るを掛て万民ものかし
安しなきむ 実はされたり此程はひとつ

掛る絵馬なれども　シテ　ことしもしめさで
二つ掛て雨をもふらし日をも待ちて
民きらくに法恵を請うるあまねくも
有なや是とぞ頼む神垣に絵馬を
掛まくや国ゆたかなるよなかに蔵れ
ミあれひとりの目に是を押人は
みずゐじんのかうろ志ぐれあて

居クセ

うけならべける駒くらべがきて縦しくめて
しは松風ろうへの夜なこそ虎見れ花は咲
そへてそなびく白雲又うきこゝろを
まこと也。僧正遍昭は哥の様はえたれども
誠すくなし。絵に書る女の姿
よめていたづらに心を動かすいは哉みだり
意より思ひきてつなぐ駒は二道のあて

中く仮しい恋路に情あふちへ多れ
手枕の夢ふて宵のあらそれて宮紫を
かたらひ合うへ行とつむべき我おは
伊勢ゝ二柱。夫婦と現て立出。伊勢ぜべ
しぎ疑ひ乃川きけ。長を明
ゆゝ内外みて。物えてまえ申さんと
長まよはぎ迷て。失よくゝ

天女
面ツレ女、黒髪
天冠、白大口
長絹、タスキ
扇

後太夫
面増女、スベラカシ
白綾、白地半切
又緋大口、白地
裕狩衣、扇

手力雄
面霊神、黒髪
透冠、着附
半切、法被
扇

中入来序

上地少南
当ク地辺
出羽越

雲

萬里よ治りて月よりと明神出
照影の宮とて出給へ我へ日
本秋津島乃大和国地祇又代ゝ孫
天照大神和光利物ハみを垂
れ
ぶくとき流れ。ちき
ぶ物ハ虚空よ滿くる五色乃雲を
ぶ出る時祈ハ成就ありがたや

ふかく樣ゝめづらしき繪のそび
の。面白のりしと。思食れぞ高
岡のもらよ繪とぞまつらく。天地
二度開きをさまり國おさ豊よ
月日光りろ。長閑き春こそ
ゝもさしきれ

等不知　四番月物　現在七面　位破　前レテ里女　後レテ龍女　所ハ甲斐　ロキ　日蓮上人

脇　大ロ僧

上ロキサシ　閑リレ　ヲ

大世尊の教法い。五時八教ふ配立
權ゴン　ロウ　二教よりもせてり。去程ふ滅ほの
弘　經も正像末よ次ぎて。今後五
百歲ろ時ゐれ時樣よけよ此妙經
と弘めり。國安全のもゝ先を為を
ゝ。ゝ甲斐ゝ。身延山おらに居り

寂寞無人の廊乃内ふ。讀誦洗淨
乃声絶ぜ。心三観の窓乃前ふ。第一義
天乃月まとうあり（上弦月）尾上の風乃音
迄も。皆法の為なるべしや。流水
清波乃ひゞきも。魚河流浪の波
声まく。鶴の林ふ。金沙乃巻
乃法の花ふ。紅葉乃風ふ立渡る

太夫
面梁
無色着流
念珠持

乃。浮雲も暗ぬきべ。この月でさやう
あまく。我法華経乃乎あき
べ。談誦禮賛と怠るゝあきおよいづ
れ共なく女性の身ゝえぬ。濁で作。今日
も又まりて。ふを見ずやと思ひ
（上段ノシテ女ト同）法の教へと聞ふ。
入うよ（コトトリサレ上ニ）有難ふて。まゝこの道ふ
方種の霊地ふ。漢ふ。四

明の洞和尚おそへ給立杖と後ゝ
おもいてまちうべき。扨又大白波木井
の河風波の立居もおのづから。隨縁
生死と顯まと谷の戸出る鶯も法
と唱つる花の枝に来て宿よ延
ひのゝ雲だゝ。雲をもうして清
ぬきべ見へも夏つそりかゝ思へ杖つ

くりかゝ罪科をもかくてそ清めれも
しやと信心へ深増よ宿有難きあ
うれく。あやしやおけ山の花よりも
かへ志る人もなき春りあるふそもや
女性の身なりあづら御経読誦のれくふ
歩みをもあび花水を佛よ捧ぎ奉ふ扨
おそこへ入まてまし面ぞて見

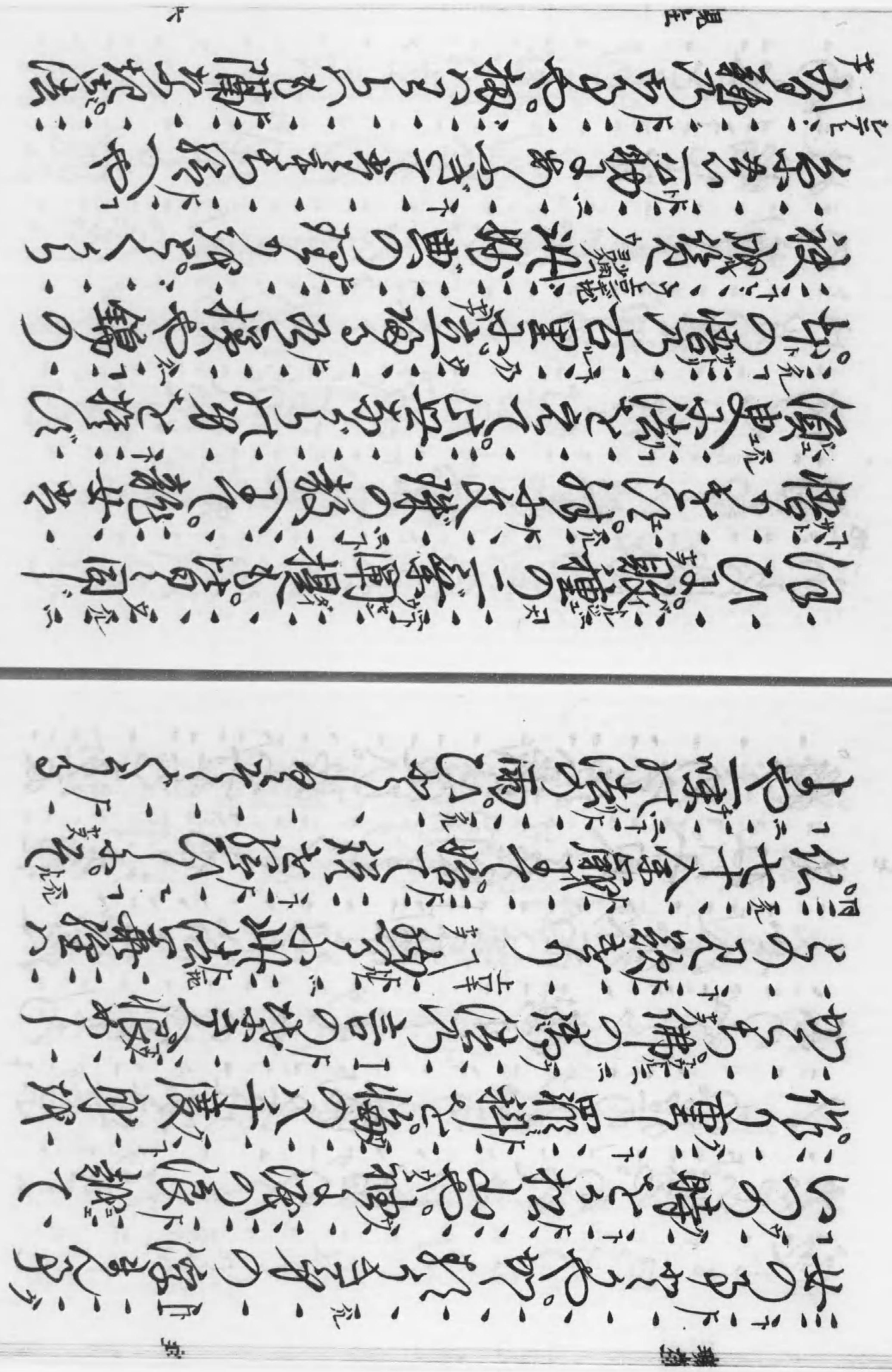
へ仏あり不信者にあらざるべからず雖も法
法は遠事なり亡者亀の海水優曇華の
花まちえる心地して悦びの涙の袂
かづく程なり縁を結ぶ法は世間
もちきびしいつろ世松の戸の酔言あ
ゆえをたずねびりぶ人は結縁となる
非なり　日蓮上人云奇特なる信心かな法華経

法を唱へ申すべき若有聞法者無一不
成仏と説給ひて二乗闡提悪人女人
わろ成仏すべきなり説ひ給
極悪謗法の者なり　上野尼御前
まるきらぬ法を隔なたるまで
いうで奴を結び給へ人なり　日蓮
狂を女の仏と為る獨逸者おそ

まッせ　中しのうち、草木国土悉皆成
佛の法を無經なきば女人出生そうり
たれ衆生も洩らさぬのなかるべし　授記
法華経といつぱ釋尊久遠劫のその
昔の成道の時さへも説き給ひし妙法
華經なり　然るに華嚴の朝より
般若の夕べに至る迄　抑止在懐志給ひて

●居クセ

時々の方便機に随ひ、時に一乗を説
かねば十界各別すぢなく也　五障
に女人は外面は菩薩に似て内心は夜
叉の如しと嫌はれしも　その境界なる
くる経のうちにみし薩婆実に、安楽京
苦みあり塚やあれ者の宿のうちにたきまよ
佛にも見ぬのまをつくれあると讃しも



乃水をあよ掬びぬ。ゆえに昔一切三界
の蝙をつくすぬ（上地）我も三界
の苦くをぬ。海無かるべくと宣ふ。法い
法分い雲神のうりよ女と成りるや（イシテ上）今世
何をうらくむ。我い七面ぬ。
月あくの教ちぬ。蜂（地上）たる蛇身あり
ちらべ懺悔乃甚為よ。なトの姿ぬ見せ

孤（上）あぐ報恩ぬ。なり姿
顕えと（ヤア）夕風も（進）立や思
雲乃。引絶も早ぬ。ふとぞろ
かい。神の。猫光（ナル）て。き。音ふま
ぶれて。失ふりく（早上三の間）あ。ぬ。
あ。ぬ。ぬ。ぬ。是法の力ぞと。を
ま。ぬ。ひて。ぬ。讃嘆とかてまち

後太夫
小面上般若面
着ル、髪、髪帯
白頭、犬龍、箔
紫大口、緋ニモ
舞衣打扶
熨斗目カヅク

居たりしく其ふりぎやかに遠へく。当へは優なる女人と見えしに。頓がても。忽ち大蛇となつて。日月の如く成。眼を開き上人の居る座をまとひ。くるくるとまとひ。慚愧懺悔の姿をあらはし座を居上て瞻仰してこそ居たりけれ

ワキ 其時上人

物着
般若面、白頭ヘル
天冠着ル、髪扇持

御経読誦し給へば。於須臾頃便成正覚と。たからかに唱へ給へば。忽ち蛇身を変じ浮く。物着 たちまち蛇身を変じて。如我等無異の身と。あまさへ。紫雲たなびき。ひよ。四種の花ふり。虚空に音楽の声きそひて鼓をうつなる。報謝菩舞の袂も。異香薫じて吹送る。松

の風親鸞乃苔を更に度ず苔
月も雲も去り和歌門。姫り上て声を
上や　謹上　拝　就鷲の山
ぴうふすきまれ。風なきべいりて
のほそ。世界もそもそも母、姫、や妙理
信受の功力。三界多満乃妙法と
うきて。和光同塵結縁の姿や顕
安泊示現して洗山の鎮守と成ぐ。
難水難もろくの。難とのそ。七福則
生乃移ひを乃て去め。世界重て元
生を度く御慶と。約束くヤル
つ。行程も白ろ。ろよ去ちまぢきて虚
空ふあぐら世移ひきり

十月　切ノ能

昭君

位破急　前ノ後ノ所ハ　前レテ白桃　後レテ單于幽霊　唐土　ツレ王母　後ツレ昭君幽霊　ワキ里人

脇　バサラ大ロ　着附　側次　扇

ワキ　サラリ

日色の唐土から海の里ふ行合せる者共で

ゆ。扨も汝所へ白桃を母と申す女房

乃ゆ。一ナ人ナ身ナ女を持つ名を昭君と

ゆ。付。宮門より召れて寵を受ける有り

し。文よりて細あつて胡国へ送られて

ゆ。去程に人の歎き涙雪あらば。迫れ

太夫
着流尉、萩箒持
扇指

ツレ
面姥、着流水衣
萩箒持

のりをそ拾よ竝とあらうのぎをと思ふ
一セイレテ人ニ少聞
越ツレテ人ニ
数ヨリ
ヨワク
おくれ花の木陰よ立ぬよきぬぐよ
ニハカニコレテサレ
月をなろこし
ミス
ウ
ウカルケ
ものを
かう、ほの日よ伯岳をるぬぐだうわうぼと
下
ツレ上
申し上ち帰の去ゆてる也
下
ツレ上
かい狂よ賜き
ミス
かきれども美ろをあらきを鳥めつの
二人
昭君こうきとろ名付つ容顔人よ勝き

ぬ、下、ちきべ帝部よ呂れくは明妃と
其ろをあらくれ天よよまりえれ
下
甲ニテ上
もきまし
かい狂いりでき男なれども
狂もおぬ宮の宿縁ぬきをるぬぐ故
ニハ
中ろ法人乃本よえろうれく胡国の
民ようぬきぬ漢宮ガ里れかすして
ナ
引ぬかの様乃ぬ思ふ抜出まれ

ちきだ供なれ宮人ども指行く道乃
風めよ。給管の数と巻つ、馬より
見ぬ時とひく事もけ時よりこのあと
面影ようつきる面影を今狂男る志ら
ふ、ゝ　上の句　朝日　ふ、ゝ　上の句　朝日
ゆ、ゝ　上の句　朝日　波昭君乃まのぐ、ゝ志ら
緑のなよ白し。雲やくる見いと柳
岩男乃名でゝ折おゝよ風法なよ志も

よ、て本陰乃塵とそ別つ山
いだく庭と清ゆん。祖父の帯をたづ
さへより宮や心を昔乃裏老のすゞる
もちぶれいとゝ男ども風
まそぶ袖乃玉だまさゝ新男
を子ゆゑまり　きゞ寄者乃賜
の男とゝやゝ　ゝ　日ハ

山のそよ入あひ乃　うねくまろ
まをすびあらし　袖宮とい思へ
おくも　乃ため　ぎれで　ぎひらび
第二十八上二
落塚乃つまる　木陰や　あらも　塵と
時雨　ん　打ちの　接る　木陰や　落
葉乃つまる　あ　をやあらも　塵や
なりぬ　舞　宮　年　ようきの　。

心よりも　塵の　ひも　あへぬ　袖
乃　露　袖　枕　乃　ん　乃　ち　水
よりも　落塚　も　袖　ぎ　ん
袖　乃　ぎれで　。　れ　み
ぢ　あ　乃　む　あ　れ　音　も
さだ　よ　ば　あ　ま　者　作
程　よ。休　ま　や　思　の　いと　屋の

関よりくだりて海に入りぬ
いや基づきまりてこそ
めりよりは。梅を昭君はいとゆ
寄りてはいとよろしき
又申べきなりければ梅乃木のかげと立ちら
びて清めたるに行とやたるはるまてらぞ
昭君胡国へうつさむ時は梅をうゑ置き

まれ胡国にて宮づくりしてあらばはやうざ
ぐ物うまれと申つるが所領へもやる
その拾く作
梅く昭君を行しる胡国へいうつちき
たまひ作ぞ
うつちきそのたへを寄るよ。天下
を治めたまひ作ぞ
絶れば胡国の

軍このゆゑして、さるべきかくしがくしきれば、生よ和睦してさきさるべきつかうんやとく美べと一人つかはべきは約束乃かりみ　そもそも漢王乃宣旨よへ、三千人の籠愛いづきとつくまく方もあり、もろくしたまふ乃好色言位のなかと貴重の障子より仏を給よ見と

あらきとゆ中よりたるれる模あらべ、則れを
えらびて、胡王乃為よつきて天下の
運をまづめむと、論言ならきをへべ、故
うづ乃多ぶるもいとまもひ
給うけるんとかうひ皆まるひと
鑽りつ、約束の故　れぐつ
きれその海いづれを見るもべよして

柳髪風よりもとゆうよ。桃花露を含んで美形ふつさ海棠も中かゝも昭君也。ならぶかゝるもなく美くしく。帝れ打ぶえ
きりゝ。ありそれときのめる故あらん
たぐうちとけくかりよ。畫圖ようもる
面影乃。あまりやうをみえゝえぞ
ばてうい電光それ。ゝと申をぜ

君よ。私乃。ぶ塚まゝとやあげん
ちうちくして昭君と坊国より送り
ぶうい。ちる　まゝ桃塚といひ人。仙
ぶと契り深うばりして。仙ぶ京ゝを
成くな。桃乃。鏡と鏡ようりきべ。即仙
ぶ乃姿ん元きれとあり。洪柳もされぐう
昭君の海ぶ。ぶを給へ鏡ようりして

影をうつむ　それを仙女のまぐらの也
いづくに見よかたをふるまき　いやそれをこ
ならびに鏡ふけ高きの人のつるまり
見れもそぐるとうかしへ　ちんやうゞ
持ちまゐる鏡　鶴の声と鏡ようの
一巻　ときつといひ様々なるも
それは昔より年をへ　宅乃鏡と
作物
鏡臺ヨス

なる水も　散りそれや昔思ふ
いくまゐ鏡　姿をうるやと
鏡よりつく　法君乃影
昭君上ヨリ
出端
見る湖国ようつ　玉昭君乃影
照君　子方寄
髪、天冠、箔
大口、坪折、扇
竜ひ　女別きと　ひ
後太夫
面小ビミ、黒頭
唐冠、着附
半切、法被
柄杓、扇持
ちよいうぎ鏡ふ影　法ひ　流り
影をうつし　女毋

ゆゑ物みえ申はべり。春は曙、月夜よ
あらはれて、地 曇りなくこそ。影うつ
早角 ばうりうや。鏡やいとも面影乃分れ
きこそよくつぞうるもなりぬるいとまて
ま形ば。鏡よりうりたるもの。見くハ朝
園乃えびもの。将軍韓非単于ゴ。幽
霊なり 胡国夷人関なりぬるる

深いとまらば。目ふさぐねぐもるよ
きく。冥途乃冥ばうりや。上 韓
非単于をゴ。同じを昭君ゴ父
母よ。対面は為よ。なり当り月なり
きれ対面うお。姿をみる。ばうりや
心ふさぐ我
ゆゑ。鏡よ。寄てうたへとよ
いぐく。鏡

よ、影をうつす鏡。ゆよ氣味悪敷ふと。鏡よ
立寄給へ、それば。ゆれ給へ。其だうを
やゝ上向スムル弟をいとぐ。
鏡よ。ものゆひさらよたまら
ねば。さて稲葉をもぢ。耳よ
きくまりをちぎ。鬼神と見
ふ。鏡もちぐ。鏡よ寄そひ立給へ

も居てもぐ。鬼とはかくれども人とはかくて
ぐそのかたちあらば。鏡よ。
今る新つまの面。目あり。とく立給へ
下向キリ、
あらば。鏡をあらはぐ。柳のあるまと
玻璃浮
れもよをつらば。ぐとみそくるる日
ぐもれ。ぐもある物思ひ。影をほのよ

大正三年八月拾五日印刷
大正三年八月二拾四日發行

版權登録

大阪府西成郡中津町大字下三番
七十六番屋敷
增補訂正
相續者　大喜多信秀

大阪市北區源藏町十番地
發行者
兼印刷者　富永久世

大阪府西成郡中津町大字下三番
七十六番屋敷
發行所　常磐會

272
176

終